

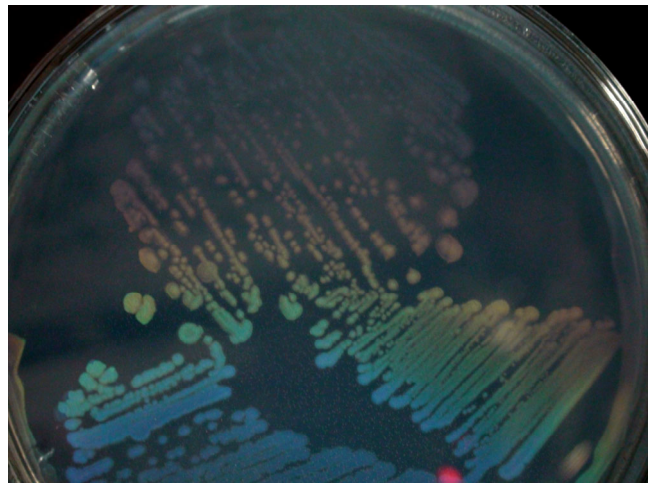
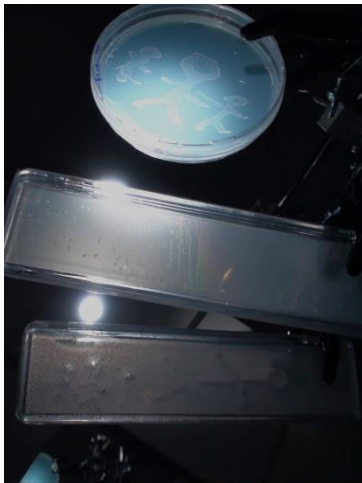
今号の表紙

Hideo Iwasaki “An der schönen regenbogenfarbenen Donau” (2010)

新型コロナの閉塞状況の中、あらゆる角度で強い（あるいは深い）メッセージ性や批評性を籠めた作品を挙げる選択肢もあり得たのだが、あれこれ考えすぎた結果、今回だけは敢えてベタにシンプルな作品を使わせていただくことにした。

この作品は、『美しき虹色のドナウ』と題されている。むろん有名な楽曲のもじりであるが、ドナウ川が青くなどなく、なかなか普通の意味で美しいとは言い難い、濁った茶色なことを見聞された方も多いだろう（強いて言えば、晴天のもとでその色が映っている時は確かに青く見えないこともない）。この作品は、私が 2010 年に、ドナウ川のほとりのオーストリア・リンツの画廊にひと月あまり滞在し、その場で作品を作るアーティスト・イン・レジデンスを行い、私自身初の個展をさせて頂いた際に、即興で作った site-specific な作品である。朝晩ぶつつづけで、ひたすらアトリエでメインの作品を作っている中、画廊主が見かねて（？）ちょくちょく連れ歩いてくれたのだが、そんなときにはその土地の微生物をサンプリングし、その場で培養して出たところ勝負で作品を作ることを思いついていた（メインはもっとかつちりした、切り絵と別のバイオアートの作品だった）。ある時、画廊主のヴィンフリートが、ドナウ川のほとり、ドイツ国境の景勝地シュレーゲンに連れて行ってくれた。その一帯で、俄かに現地の方々と一緒に環境微生物を集め、リンツのアルスエレクトロニカ・センターに持ち帰った。メディアアートの殿堂、アルスエレクトロニカ・センターには、先駆的な美術館内バイオラボがあり、そこを自由に使わせていただいたので、色々分離培養した結果、やたらに迷彩色（虹色）の散乱光の顕著なバクテリアと、寒天を溶かす（アガラーゼ分泌型の）バクテリアが分離できた。そこで、それを使って、簡単な作品のプロトタイプを現地で作ることにしたのがこの作品である。バクテリアを塗って描く、生物学的な塗布（シングルコロニー分離）によって離散的に雨のように生える、そして寒天を溶かしうがちながらレリーフとなっていく、という三様の描き方を敢えて組み合わせている。これらの明細の仕方やレリーフの陰影は、展示期間中絶え間なく変わっていく。

その旅ではしばしば豪雨に出くわしたが、ある時、同じように作品用の微生物を現地の方々と採集していた時に、素晴らしい大きな二重の虹が出たことがあった。雨上がりの虹のイメージリーは既に使い尽くされているが、それでもなおそこに見てとってしまう困難のあとの希望や安堵、そしてまたその儚さは、時としてやはり切実なのではないだろうか。



展示：“Hideo Iwasaki Solo Exhibition: metamorphorest: dialogue between paper and bacteria”, Galerie Wuensch (Linz, Austria, 2010); Courtesy: Artist-in-residence program “AIR-CUBE”; Ars Electronica Center Biolab.